

聖書：Ⅱサムエル 15：1～37

説教題：泣きながら坂を登る

日時：2018年10月14日（夕拝）

この章にはダビデの罪がもたらしたさらなる混乱が記されます。ダビデは11章でバテ・シェバとの姦淫の罪、そしてその夫ウリヤ殺害の罪を犯しました。ダビデはその犯した罪の報いをこれまでも沢山受けて来ました。まずダビデの長男アムノンが腹違いの妹タマルを辱しめるという事件が起こりました。ダビデの性的な罪がコピーされるかのように、長男は性的不道德の罪を犯し、一家に悲劇が生じ始めました。そうして次に長男アムノンにダビデが何もしないことに怒り、タマルの兄、三男のアブサロムが長男アムノンを暗殺する事件が起こりました。これもまた、ダビデの殺人の罪をコピーしたと言える出来事でした。こうしてダビデの罪は思わぬ形で彼の家に伝染し、広がって行きました。さてアブサロムはダビデのもとから逃亡しましたが、この国の将来を憂慮した軍団長のヨアブが、アブサロムをエルサレムに連れ帰り、何とかダビデとの親子関係を修復させようと試みます。しかしダビデは「私の顔を見ることはならぬ」と言って面会を許しません。その内にアブサロムが怒り、力づくで面会を求め、ようやく顔と顔を合わせるも、ダビデは表面的な口づけをするのみで一言の会話もしませんでした。冷たい関係です。そんな状況で今日の章でさらに大きな出来事が起こります。それはアブサロムの反乱です。ダビデはこの結果、まさかの都落ちを余儀なくさせられるのです。

アブサロムはやり手です。朝早く、門に通じる道のそばに立ち、王のところに来て訴えようとする人を捕まえて、「王の側にはあなたのことを聞いてくれる者はいない」と不信感を植え付けます。そして4節で「だれか私をこの国のさばき人に立ててくれないだろうか。訴えや申し立てのある人がみな、私のところに来て、私とその訴えを正しくさばくのだが」と自分を売り込みます。そして人が近づいて来ると、手を伸ばし、その人を抱いて、口づけします。パフォーマンスも上手です。こうして彼はイスラエル人の心を徐々に盗んで行ったのです。

こうした4年の準備を経て彼はついに心に秘めていた計画を実行に移します。「主に立てた誓願を果たすため」という名目で多くの人々をヘブロンに連れて行き、そこで王としての即位宣言をします。ヘブロンはダビデがかつて都とした町です。町の住民の中

にはダビデがエルサレムに行ってしまったことで、ある種の不満の思いを持つ人たちもいたのでしょう。アブサロムはそういう人たちをうまく自分のために利用します。その結果、何が起こるか知らずに付いて行った人々も含めて流れは圧倒的にアブサロム優位に傾きます。12節最後には「この謀反は強く、アブサロムにくみする民が多くなった」と記されています。

これはダビデにとって何という想定外の出来事だったのでしょうか。彼はその知らせに接して「さあ逃げよう！」と言います。アブサロム軍に対抗するにも準備の時間が必要です。このままエルサレムにいてはやられるだけです。彼はこうして一夜にして王位転落。一転して追われる身となります。しかもこともあろうに自分の息子から！これはこれまでも見て来た主の宣告の成就です。主は12章で、罪を犯したダビデに言われました。「今や剣は、とこしえまでもあなたの家から離れない。」「見よ、わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす」と。ダビデはこれまでもたくさんの悲劇を味わって来ましたが、まだ終わりではなかったのです。一層の困難がここから始まります。改めて罪を犯すとは何と恐ろしいことでしょうか。罪を犯しても悔い改めれば解決するという簡単なものではないのです。罪のためには、このようにその生涯に影響を及ぼす刈り取りの生活が行く手に待っているのです。

さてこの苦境の中でダビデはどのように歩んだか。今日の残りの記事に見るのは、このみじめな状況の中でダビデの信仰が輝き始めているということです。罪を告白し、悔い改め、神の赦しを受けた彼には、このような状況でも慰めと望みがあるということがここに示されています。3つのエピソードが以下に記されています。

一つ目は19～23節のガテ人イタイとの会話です。18節にあるように600人のガテ人がダビデについて来ましたが、その一人のイタイという人にダビデは「戻って、あの王（＝アブサロム）のところにとどまりなさい。あなたは昨日来たばかりなのだから、われわれといっしょにさまよわせるのは忍びない。」と言います。普通こういう状況では一人でも多くの味方に付いてもらいたいと思うものでしょう。敵のアブサロムにくみする民は多いのですから、一旦退いて立て直すためにも、一人でも多く助け手が欲しいはず。しかしダビデはこの危急の時も、一人の人を大切に配慮することができた。なぜでしょうか。それは彼が目に見える人間ではなく、目に見えない主なる神に信頼を

置いたからでしょう。もちろん一人でも多くの人がついて来てくれることは感謝ですが、この状況は人に頼ってどうにかなる状況ではありません。この困難の中で、ダビデは人にではなく、主にすべての信頼と望みを置く生き方へと強いられるようにして導かれたのです。そして主に頼る時、目の前の人にこのように親切に接する心の余裕と平安とを持つことができた。ダビデはイタイに、これから厳しい生活になることははっきりしているから、無理せずにあなたは都に帰りなさい、と言います。それに対してイタイは21節で言います。「主は生きておられます。そして、王様も生きておられます。王様がおられるところに、生きるためでも死ぬためでも、このしもべも必ずそこにいます。」何とありがたい言葉でしょうか！この彼は後にダビデの側で大きな働きをしてくれる人になります。これは神に信頼するダビデに対する神の大きな備え、助けであったと言えます。

二つ目のエピソードは24～29節の祭司ツァドクやレビ人との会話です。彼らは都を出る時、契約の箱を担いで来ました。この契約の箱は神の臨在の象徴です。しかしダビデはその箱を都に戻しなさいと言います。前にイスラエル人は契約の箱をそばに置いておけば祝福がやって来ると迷信的に考えて、戦場にそれを運んだことがありますが、ダビデはその過ちを犯しません。人間的に考えればダビデはとても苦しい状況にありますから、すぐれるものは何でもそばに置いておきたいと考える誘惑もあり得たでしょう。しかし彼は契約の箱にではなく、主の恵みに信頼します。もし主の恵みを頂くことができれば、またここに帰って来ることができるのだから、その時を待とう！と。一方で彼は26節で「もし主が『あなたはわたしの心になわなない』と言われるなら、どうか、主が良いと思われることをこの私にしてくださるように」とも言います。ダビデがここで思っているのは自分の罪のことでしょう。あのような罪を犯した者として、主なる神から「あなたはわたしの心になわなない」と言われても当然だと彼は考えています。そして主の前でへりくだり、主が良しとされることを私は受けよう！という態度を示しています。このようにダビデは契約の箱を運び去って、それによって神を都合よく利用しようとは考えていません。むしろ主の前で畏れ、悔い改め、主のみこころに服するという姿勢で生きています。ここに主の前にへりくだっている人の謙遜さと自由さを私たちは見ることができます。

さてそうは言うものの現実は何と厳しかったことでしょうか。30節に「ダビデはオリ

一ブ山の坂を登った。彼は泣きながら登り、その頭をおおい、裸足で登った。」とあります。また「彼と一緒にいた民もみな、頭をおおい、泣きながら登った」ともあります。あのダビデ王が都落ちして泣きながら坂を登って行く。「頭をおおい、裸足で登る」のは、深い悲しみの表現です。私たちは裸足で登ったら、かえって足が痛くなって登りづらいのでは？と思いますが、当時の人々は耐えがたい悲しみをこのように身体的表現をもって現わしました。そしてこの悲しみの時に最悪のニュースが飛び込んできます。それは 31 節にあるように、ダビデの側近アヒトフェルがアブサロムの謀反に荷担している！というニュースです。このアヒトフェルについて、後の 16 章 23 節には「当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった」とあります。彼はただ者ではありません。彼が味方と敵のどちらにいるかは戦いを左右する決定的要因となることです。その彼がダビデを裏切ってアブサロムの側についているというニュースはダビデたちを打ちのめすのに十分な知らせだったでしょう。

そんな中、注目すべき 3 つ目のエピソードが記されています。それはダビデが神に祈ったことです。このニュースに気落ちしてただ茫然としたのではなく、彼は主に向かって叫び、すがりました。「主よ、どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください」と。そして私たちがここに見るのは、主がこの祈りに豊かに答えてくださったことです。まずこの祈りの直後、アルキ人フシャイが 32 節から登場します。彼は 37 節で「ダビデの友」と呼ばれていますが、その意味はダビデの顧問あるいは相談役ということです。神が彼をダビデに遣わしてくださったのです。そしてこのフシャイがこの後、エルサレムに帰って、アヒトフェルの助言を打ち壊す働きをします。つまり主は 31 節のダビデの短い祈りにさっそくこのように豊かに答えてくださったのです。イザヤ書 65 章 24 節：「彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。」

また主が具体的にどのようにダビデの祈りに応えて下さったかを見る時に、さらに慰め深い真理を学ぶことができます。ダビデは「主よ、どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください」と祈りましたが、この祈りはその通りに聞かれたのではありませんでした。すなわちアヒトフェルは決して愚かな助言はしませんでした。詳しくは 17 章で後に見ますが、アヒトフェルはダビデを叩き潰すための完璧な提言をします。しかし何とアブサロムが愚かにも、このアヒトフェルの助言を退けるのです。それはここに

登場したアルキ人フシャイがアブサロムにしたもう一つの提言を取ることによってです。ここから思うことは、主は私たちの祈りの言葉に拘束されないということです。私たちは自分が祈った通りにならないとがっかりするかもしれませんが、主は私たちが祈った言葉を超えてご自身が良いと思われる方法を用いて事を導かれるのです。ですから私たちは主に祈りますが、その方法やタイミングについては主にお委ねし、主の最善の知恵に期待することができるのです。

そして今日の章の最後 37 節には、ダビデの友フシャイが都に帰った時、ちょうど、アブサロムもエルサレムに到着したとあります。ここにも神の奇しい摂理の導きを見て取れます。ダビデは大きな悲しみの中にありましたが、このような神の助けの御手が確実にここにあったということをこの章は記して閉じています。

私たちの人生にもこのような苦しみの時があるかもしれません。自分はまさに今そのただ中にあると思う方もいらっしゃるかもしれません。それは自分が蒔いた罪の刈り取りであることを思わざるを得ない方もいるかもしれません。しかし私たちはただ自分の罪を責め続けるしかないのではない。悪い兆候を見て、ただ怯えるしかないのではない。私たちがここに見るのはダビデのように神に罪を告白し、神から赦しを得ているなら、この章のダビデのように、恵み深い神によりすがって良いということです。神に望みを置いて従って行くなれば神が助けてくださる。私たちの思い通りではなくても主が良い方法でお導き下さる。私たちは泣きながら坂を登っているような状況の中でも主に祈って良い。主はその祈りに聞き、不思議な御手で守ってくださいます。困難からの脱出の道、救いの道を備えてくださいます。私たちはどんな中でも望みを捨てないで主に信頼したいと思います。そして私たちの祈りに聞き、私たちの思いを超えて豊かな恵みをくださる神に導いていただく歩みへ進みたいと思います。